

福永武彦『草の花』論

—— 主題を中心に ——

三十一回生 光法真帆

目次

本論

第一章 『草の花』の成立、構成

第一節 成立

第二節 構成

第二章 “愛”と“孤独”

第一節 “孤独”への埋没―「冬」―

第二節 “孤独”を源とする不可能な“愛”―「第一の手帳」―

第三節 “孤独”に執着する不幸な“愛”―「第二の手帳」―

第四節 “愛”への後悔―「春」―

第三章 “生”と“死”

第一節 “愛”を拒む“生”の迷い子―藤木の場合―

第二節 “孤独”を恐れる“生”の亡者―千枝子の場合―

第四節 “愛”を拒む“生”の迷い子―藤木の場合―

第五節 “孤独”を恐れる“生”の亡者―千枝子の場合―

第六節 “愛”を拒む“生”の迷い子―藤木の場合―

結 第四章 『草の花』の主題

福永武彦（以下福永と呼ぶ）の文学生活は、高校時代の詩作をその創始とする。彼の詩作への執着は、昭和一七年の「マテネ・ポエテ（性）」の結成に至るが、これは激しい批判を浴びて崩壊する。詩作に限界を見た福永は、『草の花』の沙見に次のように語らせている。

うん、詩は文学のジャンルの中で一番音楽に近いけどね。だけど日本語ではどうだろうか。（中略）だから僕は、日本語で詩を書くつもりは今のところないんだ。僕は小説を書いてみたい。

（「第二の手帳」）

昭和二八年、「冬」「第一の手帳」「第二の手帳」「春」の四部から成る『草の花』が完成するわけだが、その成立

過程を見るに、福永の創作意図が「第一の手帳」に集中していたのは明確である。

僕は、むかし一点の悔いることもなく生きていたか。

(中略)僕の愛した者たちは何故に僕を去ったか、(傍

点・光法) 「第一の手帳」

「第一の手帳」では「生」と「愛」のみを追究せんとしたが、「第二の手帳」の付加によって「愛」の反対概念「孤独」が、「冬」「春」によって「生」の反対概念「死」がそれぞれ浮き彫りにされ、作品の主題として定着するに至る。紙幅の関係で、本稿では第二章以下からの抜粋により、「草の花」の主題について考察していこう。

第二章 “愛” と “孤独”

熊坂敦子氏は、『草の花』を次のように分析する。^(生)

「冬」 愛のない「一つの沙漠」

「第一の手帳」 愛を求めてその渴きに憑かれる。

「第二の手帳」 愛があつても孤独の状態

「春」 結婚していることは必ずしも「沙漠」という不毛性を意味しない

希望と絶望とが交錯する中、『草の花』の登場人物は「愛」と「孤独」を如何に捉えていたのか。

第一節 “孤独” への埋没—「冬」—

「冬」は、サナトリウムで療養する汐見茂思の、「生」への執着も「死」への恐怖も超越したかのように見える剛毅な姿と甬中死に至る過程が、彼に二冊のノートを託され

た「私」の眼を通して語られる。ここでは「孤独」のみが存在する。汐見は両親と死別、たった一人の兄も郷里で忙しい身という、極めて孤独な家庭環境にあつた。しかし彼の真の「孤独」はそのような外面的なものによるのではない。病状の悪化に微塵も動揺の色を見せぬ、自己の内面に深く閉じ込めた徹底的な「孤独」である。汐見は二冊のノートを「私」に託して逝く。

第二節 “孤独” を源とする不可能な “愛” —

「第一の手帳」—

遺された二冊のノート、これが続く「第一の手帳」「第二の手帳」であり、汐見は一人称「僕」として登場する。

「第一の手帳」では、旧制高校の弓術部に所属する「僕」の、後輩藤木忍に寄せる「愛」が、部の合宿を背景に描かれる。「僕」は、その「愛」は何等疾しい要素を含まず、世間並の同性愛よりも数段高次元のもの、「美しい魂の錬金術」と命名、さらに自らが愛してさえいればよく、見返りを全く期待しないと断言する。母や妹千枝子の「愛」に包まれ、それに応えねばならぬ責任感に苛まれる藤木にとって、これ以上の「愛」は苦痛以外の何物でもなかった。「愛」を求めて充されぬが故に「孤独」な「僕」、^(生)「愛」に囲まれ、そこから逃れようと「孤独」を求める藤木、二人は接点を見ることなく藤木の「死」を迎える。

真の孤独というものは、もう何によつても傷つけられることのないぎりぎりのもの、どんな苦しい愛にでも耐えられるものだと思ふね。(中略)たとえ傷ついても、常

に相手より軟く愛する立場に立つべきなのだ。人から愛されるということは、生ぬるい日向水に涵んでいるようなもので、そこには何の孤独もないのだ。(「第一の手帳」)

この大学生春日の考え方の遂行者として、「僕」は「第二の手帳」に生き存らえていく。

第三節 「孤独」に執着する不幸な「愛」――「第二の手帳」――

「第二の手帳」では、藤木の死後やがてその妹千枝子を愛し始める「僕」であるが、その「愛」もまた不成立に終わる経緯が描かれる。これは最初から不幸な匂いを漂わせているが、その理由として、第一に藤木への「愛」の代償として千枝子の「愛」を求めたこと、第二に二人の信仰心の相違、そして第三に戦争が挙げられる。熱心な基督教信者千枝子に対して、神の存在を否定する「僕」、さらに戦争による「生理的な死への怖れ」と「人を殺すことの怖れ」は、「僕」を「孤独」へと追遣ってしまう。しかし二人の「愛」を最も左右したのは、先の第一の理由である。(本人は否定するが、藤木への「愛」に肉体的要素を含有していた「僕」は、千枝子への「愛」に全く異なる態度で臨んでいる。「第二の手帳」の山場、「僕」と千枝子は原始林で激しく求め合うが、「何かが僕をためらわせ」てこれこそ藤木への「愛」ではないか―二人は結ばれなかった。藤木の死後守り続けた自分の「孤独」に対して、千枝子は「内部への闖入者」に思われ、さらにそれを守り続

けることが、永遠なる藤木への「愛」の証としたのである。戦地へと向かう「僕」は、孤独な「死」を予感する。見送りに来た友人立花は、それを察してか「死」を免れる要領を詳細に説明するのだった。

第四節 「愛」への後悔――「春」――

「春」は、再び主体が「私」に戻り、千枝子の居所を捜し当て、汐見の「死」とノートの存在を手紙で知らせたところ、彼女から返事―懺悔の書―が届き、それが中心となる。千枝子は自分の「愛」と「孤独」を原始林の抱擁に賭けるが、後に残ったものは神への「愛」と汐見に愛されなかった「孤独」である。彼女はそれを癒す為に、「兄の影響のまったくないところに生きている」石井に嫁ぐが「孤独」は増すばかりである。しかし家庭に真の幸福には至らなくとも安楽を感じる千枝子、反面不幸な「愛」と「孤独」を抱いたまま死んでいった汐見、彼女は身を切られるような後悔を感じながらも、家庭に縋らずには生きてゆけぬのである。どうぞわたくしをおゆるし下さいませ。

(「春」)

それは喉の奥から絞り出された言葉である。

第三章 「生」と「死」

第一節 「愛」を拒む「生」の迷い子―藤木の場合―
藤木の「生」は多くの「愛」に囲まれ、その「愛」が深ければ深いほど、彼はより優秀な息子として、兄として、「生」を全うすることを強いられる。しかし「僕」と藤木

の二人が和船に取り残された一件は、藤木の本心を露呈させてしまう。即ち藤木は「僕」の「愛」に不可解さを感じながらも、心の何処かで応えんとする欲求をもっていたのである。悩み傷つく藤木は、「一人きりで誰の助けも籍りないで、歩いて行」く「孤独」（と呼ぶよりも語調としては寧ろ「自由」に近い）を求める。そこでのみ自らの「生」を生きられると確信する。しかし藤木は敗血症の為に一九歳の若い命を散らす。そして今、私の心を強く捉えて離さぬ一つの疑問、敗血症による「死」を迎えなくとも藤木は自らを「死」に至らしめたのではないか。「孤独」は安易な逃場ではなく、そこでは強固な精神力が必要とされる。藤木にそれが内在していたか。私は首を横に振らざるを得ない。

第二節 「孤独」を恐れる「生」の亡者―千枝子の

場合―

千枝子、藤木千枝子として「第二の手帳」を生きた彼女は、「春」に於いて石井千枝子を生き続けていく。まず前者の彼女を考察しよう。千枝子の「生」を支配するものは基督教であり、「生」に妥協を許さぬ潔癖家となることを自分に強いている。反面宗教への信仰心が篤い者としては稀な現実家である。このような千枝子は、三人の中で最も強く「生」を感じさせるが、これはそれぞれがもつ「生」への執着の差異に起因する。千枝子は生きている自らの手で、汐見の「愛」を勝ち取るうと必死になるが、万が一その「愛」を得られなくとも「生」は確呆出来るよう、基督

教を利用する。つまり仮にその「愛」が失敗に終わろうとも信仰による悦びを共にする仲間の存在は、千枝子が「孤独」に陥るのを防ぎ、結局彼女の「生」は脅かされずに済むことになる。しかしそのような千枝子の心を過ぎつた不安、果して現在の「生」に満足しているのか。「春」は苦悩する「生」を描く。千枝子は初めて「生」に於ける「愛」の重要性に気付き、後悔の念に苛まれる。汐見は汐見の、自分自身の、各の道おのちのちを行くことが各を幸福にすると確信していたが、「本当に燃え上つた愛に較べれば、そんなものは恐らく何の意味も持た」ぬことに気付く。先に千枝子を「愛」に打算的な「生」の亡者であるかのように述べたが、そうたらしめたのは他ならぬ汐見である。千枝子に「愛」を囁きながらも藤木を愛し続ける汐見、彼はそれを知り抜く千枝子に「愛」を捨てさせ、「生」への固執を強いている。現在の「生」が如何に不幸であろうとも、千枝子は家庭の内で「生」を生き続けさせられ、逆にその家庭を守る為に「死」を拒否せざるを得ないのである。

第三節 「愛」に飢える「生」の不満者―汐見の場

合―

一八歳の春、「僕」は藤木との「愛」の共有即ち充実した「生」の確保という観念に憑かれていた。「僕が生きているのは、この愛のため」と宣言、「愛」に苦悩するよりは「ひと思いに死を選んだ方がまし」と自問、「僕」として「愛」と「生」「死」とは正しく直結したものである。女（こゝろ）を（こゝろ）に（こゝろ）、「愛」は（こゝろ）と（こゝろ）

うのではないかという不安が生じるのも当然であろう。しかし「僕」は生き続ける。そうする限り、藤木は「僕」の記憶の中で、より美化されて生き続けるのである。しかしこのような「生」に何時まで耐え得るか。「与えられた場所」で生きられない人間は、何処に行つたつて生きられない」、春日の言葉には「死」の影を帯びる「僕」を救わんとする願いが込められている。

二四歳の秋、「僕」は春日の考え方の忠実な継承者として存在する。千枝子と原始林を散歩する時、「僕」は藤木の為の「生」を棄て、彼女との現実的な「愛」に「生」を求めようとする。しかしこれは受動的な「愛」を否定する春日に反することになる為、二人は結ばれるに至らなかつた。戦地へと向かう車中、「僕」はそこで迎えるであろう孤独な「死」を予感する。

復員後の汐見は、以前と全く異なる「生」観「死」観をもっている。「肉体が少しづつ参つて行くのを見詰める」のが「生」であり、そのような「生」の終幕の「単なるしるしに過ぎない」のが「死」であると定義する。満州の奥地で、汐見はこのまま「死」へと導かれることに魅かれながらも、耳の奥には東京駅の別れ際の立花の言葉、「死」を免れる為の要領が常に響いていた。彼の激変はこの後、復員して身体が病魔に蝕まれていることが証明された後に起こる。「生」や「死」に無関心であるかのように豪語する汐見は、過去の「生」の記録である二冊のノートを、それが読者を想定せずに記されたにも拘らず、「私」に託して

無謀な手術に臨む。

汐見の「生」「死」もまた不幸であった。彼の「生」の転換期―和船に藤木と取り残された時、自分の気持ちを総べて口に出していたら、合宿の帰路、藤木と山越えをしていたら、千枝子との結婚を彼女の母親から仄めかされた時、実のある返答をしていたら、原始林で千枝子と結ばれていたら、出征の挨拶に千枝子の家を訪ねていたら、―に於いて幸福を掴む機会チャンスは明らかに存在したのだが……。

第四章 『草の花』の主題

人はみな草のごとく、その光栄はみな草の花の如し。

福永が『草の花』エレグラムの警句として掲げた、新約聖書の抜粋であるが、熊坂氏によると、これは二四節後半、二五節と次のように続く

草は枯れ、花は散る。

しかし主の言葉はとこしえに残る。(注4)

警句の解釈を、氏の指摘する補足箇所を含めて要約すると、「いかにはなやかでも、無常な人の命、いつさいの人間的な事物と永遠に生き、永遠に続く神の言葉とを対比させている」となる。「草の花」の指すものは何か。警句では汐見、藤木、千枝子の三人を思わせる。しかし二四節後半「草は枯れ……。」―によって汐見、藤木に、二五節「しかし……。」―によって汐見唯一人に絞られる。つまり前者は「死」を表わすことから、千枝子が除外され、後者が示

すものは、永遠に“愛”を希求する汐見に他ならない。ここで新たな考察が可能となる。“太陽”の恵みを受け、それに応えて“草の花”が生長するように、“草の花”汐見に於いても“太陽”なるものが存在したのではないか。

藤木一家―藤木、千枝子、そして彼等の母親―は“太陽”になり得たか。答は否である。孤独な家庭環境にある汐見は、出来るものなら自分もその一員になりたいと願っていた。しかし藤木一家の強固な結び付きは、汐見の介入を許さなかつた。合宿の帰路の山越えに、藤木との“愛”の新たな展開を期待していた汐見であったが、母が急病との千枝子からの電報に、藤木は一足早く寮を発つ。また千枝子との“愛”の背景には藤木が存在し、出征直前の音楽会に、やはり千枝子との“愛”の新たな展開を期待したが、汐見が送ったその切符は、彼女の母の手により千枝子の目には触れなかつた。そして両親がおらぬ汐見は、この母親に甘えたかつたが、彼女の口から出る言葉は、藤木兄妹の将来を思遣るものばかりであつた。彼等は“草の花”に立つて寧ろ冷たい“北風”のような存在であつた。

結論を述べよう。汐見に於ける“太陽”、それは春日、立花、“私”の三人である。春日、汐見が信頼する彼は、藤木への“愛”に懊悩する汐見にしかるべき“愛”と“孤独”の姿を説明する。そして汐見は「第二の手帳」即ち千枝子との“愛”に於いて、その忠実な実行者となる。立花、彼は「いつも黙って僕を見守り、直接にそれと感ぜられないような、実のある友情を注いでくれた男」であり、

二つの“愛”に破れた汐見が戦場に“死”を求めたことを察し、それを免れる為の要領を教授する。果して汐見は無事に復員する。「私」、常に“死”と背中合わせの病を患いながらも、それを苦にする様子を徹塵も見せぬ汐見に立つて、彼は話し相手であり、唯一の理解者であつた。芸術家「私」への報酬として、かつて自身も芸術家を志した汐見は、彼の最高の所産である二冊のノートを託す。以上三人に於いては、一方が恵みを施し、他方がそれに応えるという“太陽”“草の花”の関係が、汐見との間に見事に成立する。

『草の花』の主題は、汐見、藤木、千枝子の三人を巡る“愛”と“孤独”そして“生”と“死”である。しかしこれを表の主題とするならば、本章で述べた汐見と春日、立花、「私」三人との“愛”（というよりも語調としては寧ろ“友情”に近い）を裏の主題として確立し得るのではないか。『草の花』は福永の自伝的性格をもって成立し、それは福永自身が事実を過去のものとして客観可能となつたことに基くことが明らかにされている。^(注6)果してそう断言し得るのか。裏の主題の存在は、表の主題に於ける余りにも不幸な汐見に対して、福永が与えたさやかな幸福、これは取りも直さず、福永が不幸な彼自身に差し伸べた救いの手である。裏を返せば、福永にとつて苦悩に充ちた青春は終わりを告げておらず、今尚彼の内に尾を引いていることを意味する。「小説と二重写しに、作者の孤独な精神生活がのぞいてみえるような作家」^(注7)、三島由紀夫の言葉ほど、

福永の姿を如実に言い表わしたものはない。しかし希望を
与えるはずの裏の主題の存在によって、却って汐見の姿が
哀れに見える、即ち表の主題の悲劇性が増したように思え
るのは、何とも皮肉な結果である。

注1. 文学グループ。毎月一回、主に加藤周一宅に集ま
り、日本語定型押韻詩を朗読した。この名称を与え
たのは福永だといわれている。

注2. 草の花（『国文学』昭和四七年一月号）

注3. 『草の花』本文からの引用。以下「」による引
用のうち、注及び特別に指示のないものは、総べて
『草の花』本文によるものである。

注4. 注2に同じ

注5. 『聖書注解 旧新約聖書 全一卷』

注6. 『「草の花」遠望』（昭和四八年一月、福永武
彦）には作中の「僕」がどのように苦しんでいよう
と、それを書いている作者はその「僕」を含めた世
界を、戸田合宿の仲間たちや藤木の母や千枝子の友
達などのいる世界を、或る調和の中に、一種の愉し
さを込めて思い返しているところがある。とある。

注7. 福永武彦著「草の花」（『群像』昭和二九年七月
号）